

新修 名古屋市史だより



31
2013.03



名古屋市市政資料館

第28回「新修名古屋市史を語る集い」から 歴史と最新研究から学ぶ 南海トラフの巨大地震

「新修名古屋市史」編さん事業は、本文編に続き平成十四年度から資料編の編さんに着手してきましたが、八回目の配本として「考古2」を今年三月に刊行し、五月から発売できる運びとなりました。さらに二十五年度には、資料編の最後となる「近代3」を発売する予定で、鋭意作業を進めているところです。

こうした中、昨年十二月一日、ウイルあいち(名古屋市中東区)で開催しました「第28回新修名古屋市史を語る集い」では、地震に関するお二人の専門家に、講演いただきました。名古屋消防団連合会のご後援のもと、会場には大変多くの防災に関心のある市民や歴史愛好家の方々が訪れ、充実した集いとなりました。今回はその内容をご紹介します。

南海トラフの巨大地震と

その被害予測

信州大学教育学部准教授 廣内 大助

ご紹介いただきました信州大学の廣内と申します。

今日は「南海トラフの巨大地震とその被害予測」というお話をさせていただきます。

昨年私達の住んでいる名古屋の地域に非常に大きな影響を及ぼす可能性のある南海トラフの地震について新しい評価結果が出ました。

皆さんに、古い情報も見ながら新しい情報もお知らせして、どんなことが私達の周りで起こると予想されているのか今日はお話しさせていただこうと思います。

まず始めに、私達の住んでいる地域にも近い将来、津波を伴った非常に大きな地震が来るだろうと予測されています。その非常に大きな地震の前後で阪神大震災クラスの地震がいくつも起こっているという過去があります



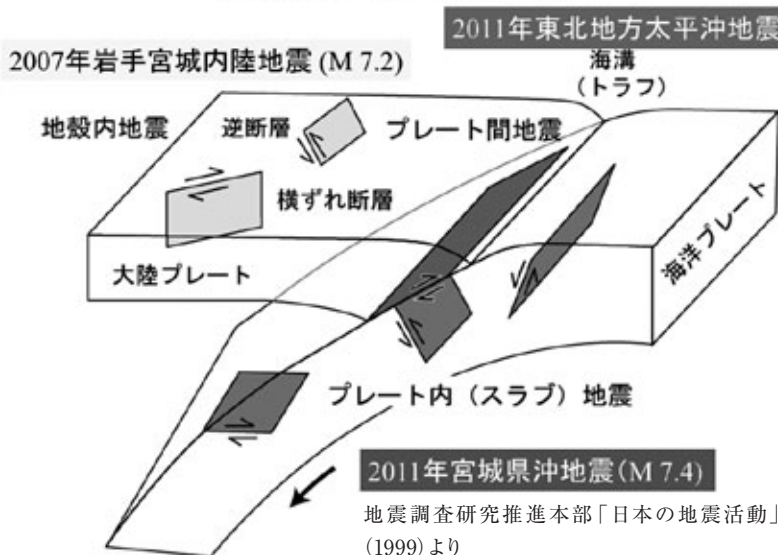
ので、どういうことなのかをお話しします。

また、最近テレビや新聞で少し出てきたと思うのですが、名古屋の直下で今まであまり指摘されていなかった活断層があると言われており、その情報提供もいたします。

そういった巨大地震の話をいろいろすると、何か無力感に駆られてどうしていいかわからないということになるかもしれませんが、一方で新たに公表された地震の予測の中で、私達がいろいろ努力をしていくことによって、皆さんの人命が助かり被害が減少すると言われておりますので、それについてどれくらい被害が減るのか、私達は何をすればいいのかも最後に少し触れたいと考えております。

日本付近はなぜ地震が起こるのかですが、太平洋プレートやフィリピン海プレート、ユーラシアプレートがギョウギョウ押し合いながら、一つの下に一つが潜り込む動きをしており、形が歪むぐらいに押されて普段から締め付けられている場所だというのが、この図でお分かりいただけると思います。

地震はここで起こる！



海側からフィリピン海プレートや太平洋プレートがギョウギョウ押ししているのですけど、このスピードがだいたい五センチから八センチぐらいですが、ずっと押されてくると、いつかは耐えられなくなって反発します。反発するときに地震が起こるのです。

プレートの境が一番弱い所ですから、押されて、我慢できなくなったときにズルッと動きます。動くときに非常に大きなエネルギーを出して地震を起こすのがプレート境界型地震です。まさに昨年の東北地方太平洋沖地震です。

それから、ここで動く歪みも解消されるのですけど、

それだけでは足りなくて、例えば陸のプレートの直下で弱面を使って滑り地震を起こします。これが内陸直下型地震、いわゆる活断層の地震と言われているもので、例えば二〇〇七年の岩手・宮城内陸地震であるとか、一九九五年の兵庫県南部地震はこのタイプに当たります。それから、沈み込むプレートの中でも破壊が起こります。それをプレート内スラブ地震と呼んだりします。このように、いくつかのタイプがありますが、このプレートの境で起こるのが一番大きな地震を引き起こすものであって、今予想されている南海トラフの巨大地震もこのタイプです。

さて、東日本大震災は実際に起こってしまっていて、私達は衝撃的な映像を目にしたのですが、よく言われることは「あんなすごい地震が起こることがまったく予測されていなかったのか」ということです。

地震発生の予測を検討するようになった一つの契機は兵庫県南部地震である阪神・淡路大震災です。それ以降、この三陸沖では何種類も地震が起こるだろうと検討されていたわけです。その中で、特に仙台の宮城県沖では地震が何回も起こっています。

ここで次もマグニチュードで言うと七・五ぐらいの地震が起こるだろうと考えられています。それから、この北側の三陸沖、三陸沖南部海溝寄りという所でも、マグニチュード七・七ぐらいの地震が起こるだろうと考えられていたのです。

この二つについては、連動するとマグニチュード八ぐらいの地震になるだろうと言われておりました。

そして、その地震自体の発生確率は今後三〇年以内に九九割の確率で起こるだろうという予測で、非常に高い発生確率が予想されていました。ですから仙台は非常に

防災意識が高くて、地震がそろそろ来るかもしれないということ、いろいろな準備をしていたわけです。

一方で、この図を見ていただきますと、その他の三陸沖北部地域であったり、南側の福島県沖ではあまり地震が発生するとは言われていなかったのです。

全体が一つの領域として、すごく大きな地震になるということは実は想定されていませんでした。

国が想定していた地震の範囲と重ねて見ますと、この点線の範囲は実際に動いた領域で、この四つから五つぐらいの範囲がまとめてドドドッと動いてマグニチュード

長期予測の対象地域と 2011年東北地方太平洋沖地震の震源域



地震調査委員会 三陸沖から房総沖にかけての地震活動の長期評価について(2002)より



地震調査研究推進本部政策委員会第24回総合部会 島崎委員提出資料(2011)より

ド九・〇という非常に大きな地震を起こしたというのが現実だったわけです。私達は将来起こる地震について、ただ計算から出すということではなく、過去に起こっているものに習って、将来どのような地震が起こるかということを考えています。

ところで、今回津波を見て分かったのですが、波はずっと陸に入ってきて、そしてある所まで行くと止まって今度は戻っていくわけです。ドロドロの黒い水は泥などを巻き込んで、内陸に入ってきたところで一回止まり沈殿します。

地下には過去の時代に溜まった地層がたくさんあり、調査をしてその中に過去の津波で溜まった堆積物を見つけることができれば、そこまで津波が来たことが分かるわけです。さらに、こういった地層の堆積物はいつ頃溜まったのか、今の化学分析で調べることができます。

歴史資料と比較してみると、八六九年に貞観地震という地震があったのですけれども、これは『日本三代実録』という記録がありまして、当時の国府があった多賀城で非常に大きな揺れと巨大な津波があったと記されています。これに対応するであろう堆積物は、宮城県の内陸のたくさんの地点で発見され、県内に留まらず福島県まで含め何か所も発見されています。実際に地質学的な資料に基づくと、過去の津波の復元ができて、それによって、東日本大震災と同じぐらいの地震が千年に一回ぐらいの間隔で起こっていると分かったわけです。

これがかなり早く分かっていけば、もしかしたら東日本大震災という凄い地震があると予測できたかもしれません、分かったのは本当に最近だったものですから、予測には間に合わなかったということです。

さて、今回の東北地方太平洋沖地震ですが、震源域の

長さはいたい四五〇キロとされています。地震というのはプレートとプレートがずれる面積が大きければ大きいほど大きな地震になるので、非常に大きなエネルギーを出したのだということが分かるわけです。

小さい地震では、割れる面積が小さいのですが、終わりますが、あの地震はそれだけ大きな範囲が破壊されたわけです。そして、そのすべり量は、これは計算値ですけれども、だいたい地下の一番大きくずれている所で五〇センチ以上ありました。

国土地理院が電子基準点を日本中に張り巡らせており、常に人工衛星で、その位置の確認をしています。地震はただか数分の出来事ですが、その地震の前と後で比べると相当ずれています。

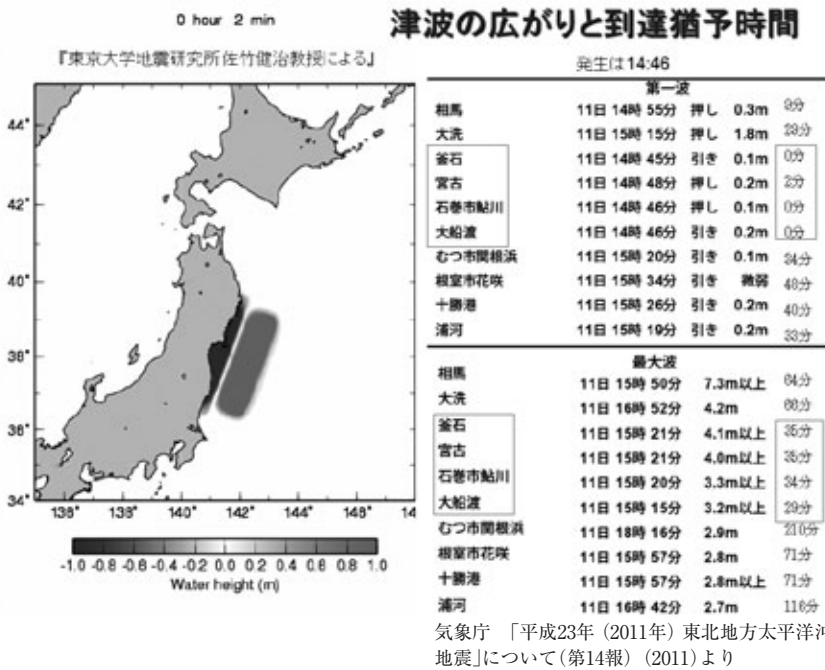
地下で五〇センチ以上ずれたのですが、ずれる地表まで来ると、ずいぶん減り、一番大きくずれたのは宮城県の大鹿半島で五〇センチ以上ずれています。水平方向だけでなく、大鹿半島では一〇センチ以上地面が沈んだのです。今回の地震の後で、地面自体が沈んでしまつて水が抜けないという地域が非常に広がりますが、陸地で一番沈んだのは大鹿半島です。

次に震度ですが、一番大きく揺れたのは震度7。観測点は一地点か二地点しかなく、ほとんどの地域で震度六強です。六強の範囲が非常に広く及んでいて、とても大きい揺れだったということです。

余震の回数は一二月までの累積結果で六百回ぐらい起こっています。

その中で、阪神・淡路大震災のマグニチュード七・四や中越地震のマグニチュード六・九に匹敵するような余震が六つも起こっています。

さらに津波ですが、東京大学の佐竹先生のシミュレー



ションによると、一時間半で北海道にだんだん届いて、一番先端は二時間から三時間経過して、このあたりまで届いています。ブルーのところは水が引いた所、赤のところは盛り上がったところで、始めはこの福島県沿岸では水が引いている様子が分かります。その後、赤い波が押し寄せてきています。それは全域で似たような状況なのです。

どれくらいの猶予時間があつたかですが、三陸地方は軒並み一分以内に津波が来ています。ただ、この津波というのは第一波で一〇センチとか二〇センチ

なので、これはさほど影響はしていません。我々が非常に問題にしたのは最大波と言われる一番大きな波がどのくらいで来たのかということです。釜石で三五分、宮古で三五分、石巻三四分など三陸では約三〇分であつた波が来ました。三〇分あると随分あると思うのですが、グラグラッと三分か四分の揺れが終わって、家族みんなが大丈夫か確認します。するとだいたい一〇分ぐらい経ってしまいます。それから外の様子を見たりして二〇分ぐらい経過してしまいます。その後一〇分ぐらいで津波が来てしまうのです。

一方もう少し離れると、福島県相馬市や茨城県の大洗だと約一時間後に最大波が到達しています。波がどのくらいの高さまで届いたかということについては、今回分かつたものでは標高四〇メートルのところまで届いていて、その他の三陸地域の多くで三〇メートルは優に超えており、非常に凄まじいものがやってきたということです。

それから、どのくらい内陸まで来たのかということですが、仙台空港付近では約五キロ内陸まで津波が入っています。人が一時間で歩くよりも更に奥まで入ってきており、なかなか逃げるのも大変だというのが分かります。

どのくらいの人がこの地震・津波で被害を受けたのかについては、五月二六日の時点ですけれども、死者確定数が一万五千人で、行方不明者が八千六百人ということになります。

阪神・淡路大震災は、死者が六四三四名で行方不明者が三人だったことに比べると、非常に大きな人的被害が出ていることが分かります。

被害はいろいろな分野で出ていて、案外困るのは下水道です。水が止まって流せなくなると、トイレの使用ができなくなります。それから、流通業はどれだけ被害を

受けたか。被災地のスーパーの三割、コンビニの四割は営業停止でしたが、被災地にあることを考えるとよく頑張った営業しており、結構頼りになったようです。

それから、ガソリンスタンドは直接津波等の被害を受けなかった内陸でも、供給が止まり営業ができなくなり半分以上が閉まってしまいました。それからフェリーやバス、鉄道についても、当然ストップしました。

病院については、三八一ヶ所あったのですが、全壊一棟、一部損壊二九六棟と、ほとんどの病院で被害が出ました。我々はケガをしたら病院へ行きたいのですが、けれども、病院自体も被災していたのが現実だったということです。

このようにまとめますと、東日本大震災は大変に大きな地震であり、被害の内容を見ると、普段あるべきもの、頼らなくてはいけないものが機能しなかった様子が、非常によく分かるのではないかと思います。

さて、東日本大震災は、名古屋の人にとっては、揺れは感じたけれども、ちよつと遠くの出来事でした。しかし、今度は当事者として起きる地震が予測されているのだということをお話しします。

私達が住んでいる名古屋の沖合に、同じようにプレートが沈み込んでいる所があります。その沈み込んでいる所を「南海トラフ」と言いますが、その南海トラフにおいても大きな地震が起きることが予測されています。また、地震は過去にも起きています。それは南海地震であり東南海地震、そして東海地震です。

東北地方は歴史記録が近畿地方に比べて圧倒的に少ないですが、この地域はたくさん過去の地震が記録されているので、いろいろなことが良く分かっています。

過去の地震の記録を調べていきますと、一四九八年以

降、七つの地震が起っています。それらは、だいたい九〇年から一五〇年に一回ぐらいのサイクルで起っています。

一番最近のものは一九四四年・一九四六年の昭和東南海地震、昭和南海地震であり、その前が一八五四年の安政地震です。九〇年の間を空けて起っています。その前が一七〇七年の宝永地震。一四七七年の間で起っています。その前が一六〇五年の慶長地震で、一〇二年の間で起っています。ということ、だいたい九〇年から一五〇年に一回起る、と言われるわけなのです。

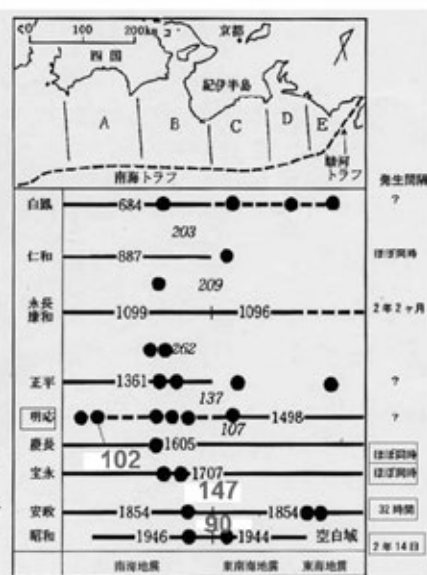
過去に発生した巨大地震

1498年以降, 5回7つの地震.
約90~150年に1回?

1707宝永地震

1854安政地震

1944東南海地震,
1946南海地震



次の東南海地震もしくは、東海・東南海連動地震に備える必要がある

中央防災会議専門調査会資料(2011)より

つまり、次に地震が発生するのは、最短で一九四四年に九〇年足した頃の可能性もあります。

もし一五〇年間隔だったら、もう少し延びますが、いずれにしろ近い将来その時代に入っていくということ、備える必要があります。

過去の経験に基づいて、次も恐らく同程度の間隔で起きると言われているのであり、何か一生懸命計算したシミュレーションの結果でそろそろ起きる、と言っているのではないのです。

これら過去の地震はどんな様子だったのかを、歴史から話をしていきます。古いほどよく分からないのですが、分かっている一九四八年九月二日の明応という時代に、明応地震が起りました。被害分布の資料から推定しているのですが、マグニチュード八・二から八・四ぐらいで、津波の記録から、たぶん東海・東南海地震は連動しており、当時の名古屋の震度は五から六と考えます。

熊野本宮とか那智の坊舎が倒壊した記録が残っています、おそらく渥美半島や伊勢は震度六以上だろうと言われています。やはり山崩れ、亀裂などが発生しており、被害記録から復元した結果、これぐらいの震度であることが分かっています。

この明応地震では、津波が起っています。一番大きかったのはだいたい一五メートルの津波が来ています。

伊勢大湊で千棟の流出家屋があった。それから伊勢志摩では溺死者一万人。これはアバウトなので本当にどのくらいかよく分かりませんが、多くの人たちの命が失われたことが分かります。このとき浜名湖では、津波によって砂堤が断ち切れ、「今切れの変」が起りました。津波で壊されて浜名湖と外海が繋がったという記録が残っております。

さて、その次の慶長地震は一六〇五年の二月三日に起こりました。これは東南海・南海の連動型で名古屋の震度は五ぐらいです。津波の被害が非常に大きかった地震で、犬吠埼から九州まで津波が押し寄せました。渥美郡では「津波達し船を打ち破り網を流す」という記録が残っています。

また、紀伊半島の広村で七百棟が流失し、四国の阿波鞆浦では死者が百人を超え、徳島県の穴喰では津波六尺、死者千五百人という記録が残っています。

そして次の宝永地震は一七〇七年の一〇月二八日です。新しくなると記録が多いので、地震の規模が精度良く予測できるのですけれども、マグニチュードは八・六ぐらいで東海・東南海・南海の全部連動した非常に大きな地震だったと考えられています。倒壊家屋が六万棟、死者が二万人という非常に大きな被害を出しています。

東海道筋や伊勢、紀伊半島で甚大な被害が出て、袋井は全滅、浜松、見付、舞阪、鳴海、熱田で半ば潰れ、名古屋城の土塀等はほとんどが損傷したという記録が残っています。

また、津波も甚大で紀伊半島では軒並み五尺を越えていただろうと推測され、一万棟を超える建物が流失し、溺死者が千人単位で出ていたということが分かっています。

それから、この地震と津波で特徴的なのは、地震が起こったのは一〇月二八日ですが、その一ヶ月後に富士山が噴火して富士山の東側に噴火口ができています。ここから大噴火を起こして、江戸では昼間でも明かりを点けないと真っ暗になるという記録が残っており、地震と火山は非常に密接な繋がりが考えられています。

その次が、一八五四年の安政東海地震です。安政東海

地震は非常に大きな地震で、これもマグニチュード八・四。震度六以上が静岡県から愛知県の広い地域に及んだことが分かっています。

このときは伊勢や熊野で一〇尺を超える非常に大きな津波が来て、損壊があったことが分かっています。安政東海地震の三二時間後に今度は四国側で安政南海地震という巨大地震が起こりました。

大阪では地震が起こって家がグラグラになって、人々は怖かったから船に避難していたのです。津波が二時間後に来て、その船がどんどん揺すられて、橋にガンとぶつかって橋が落ち、船もことごとく沈没したことを描いた絵が残っています。また、紀伊半島から四国の沿岸で五尺を優に超える津波が押し寄せたという記録が残っています。

一番新しいのが、一九四四年の昭和東南海地震です。戦時中で経験されている方も会場の中にいらっしやるかと思いますが、中川区・南区・港区の辺で非常に多くの住居が倒れました。

この東南海地震でも大きな津波が来ていて、尾鷲市の賀田で九尺の津波が来て三千棟の家が流され、二五〇人が亡くなりました。だいたい地震発生から一番早い所で、五分で津波が来ています。

そうすると、三陸の三〇分よりもずいぶん早いということがわかります。それから伊勢湾の中に入って来て、だいたい三〇分です。名古屋港まではもう少し時間があつたと思いますが、それくらいで来ています。アメリカ軍が三日後に写真を撮っていて、船が打ち上げられている様子が分かります。三重県内のたぶん尾鷲だと思っただけですが、本当に何もなし。これは片付けたのではなくて、全部津波に持って行かれてしまったのです。

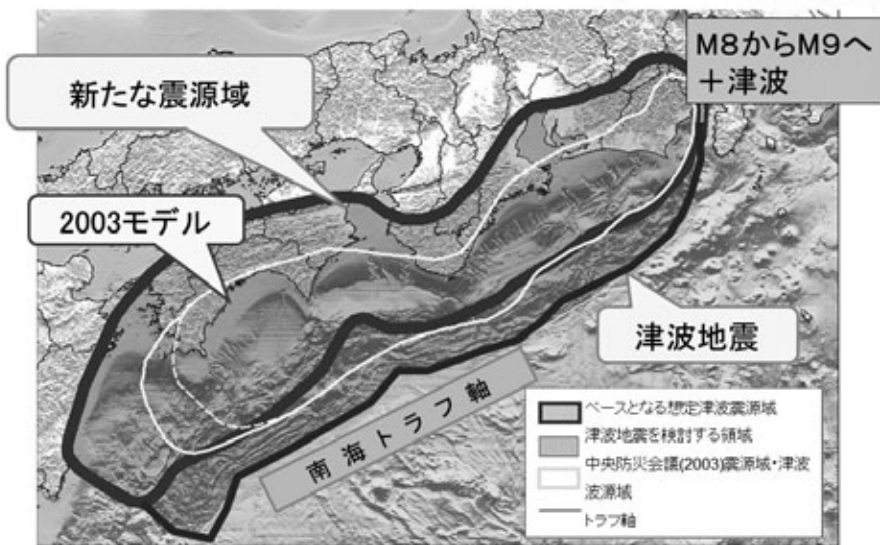
それから、今度は一九四六年に四国側が地震を起こしています。このときも死者が千三百人、全壊一万棟という被害を出しています。いずれにしる名古屋では震度五から六くらい揺れているのです。

このように、過去の南海トラフの巨大地震は百年とか一五〇年の間隔で何度も起きており、その度にひどい目に遭っている記録が残っています。だけど私たちはどうしてもそれが他人事のように思えてなりません。そこが問題なのです。

そういうことを受けて、二〇〇三年に、この地域にどんな津波や地震が来るかということが公表されました。名古屋は震度六弱以上だと出ていました。実は名古屋でもこれに対応してハザードマップを作って、みなさんのお宅に配ったり、いろんな対応をしていますが、その根拠はこれなのです。ひどくなると予想される三重県では津波は五尺となりました。

(次ページ図) 今までは、二〇〇三年モデルの領域で地震が起こり、これが連動すると一番大きな地震になると考えられていました。ただ、宝永地震を見てみると、九州でかなり被害が出ているので、どうも日向灘沖のあたりも一緒に動く可能性があり、過去に動いた場合もあると分かっています。だからMAXを考える場合は、少し西へ伸ばさなくてははいけません。それから、慶長地震の場合は非常に津波の被害が顕著で、浅い領域まで大きくすべっています。海底に近いところまでたくさんずれ、海底がその分盛り上がりつつ津波が来ているわけだから、そういう浅い部分もちゃんと考慮しましょう。また、深い所は地震でないときにずるずる動いていると考えられているんですけど、そういう部分も一緒にすべると考えました。

南海トラフで新たに想定される巨大地震 (2011.12.27内閣府発表)



南海トラフの巨大地震モデル検討会中間とりまとめ(2011)より

見直された結果がこれで、二〇〇三年モデルでは白い線で囲った部分ですが、それより深い部分、西側、津波を起こす浅い部分も考慮して、黒い線の範囲まで一緒にするとすると面積が大きくなりますから、マグニチュードが大きくなって九くらいになり、今回の東日本大震災と同じくらいのスケールの地震を想定する必要があります。

その結果を二〇〇三年のものと比較しますと、例えば

名古屋が震度六弱だったのが、名古屋だけではなく春日井とか少し北の方も含めて震度六強となりました。それから静岡県は震度七の範囲が非常に広いところが出てきました。今まで震度七の範囲はなかったのですが、広い範囲となりました。私たちの関わるこの地域に、非常に大きな違いが出てきました。それから、全体的に幅が広がっています。それだけ大きなエネルギーが出て強い揺れが日本列島の広い範囲に及ぶのだということが公表されました。

それから津波ですが、駿河湾から紀伊半島沖がいちばん大きくすべったと仮定した場合が東海地方に大きなダメージがあつて、名古屋港周辺の今までの予想では一から二だったのに、二から五ぐらいの予想になりました。相当なダメージを沿岸に及ぼすだろうことが想像できるわけです。いちばん奥の名古屋でそれくらい、伊勢湾内でも五ぐらいから一〇ぐらいの津波が来るのではないかと非常に衝撃的な予想がなされています。

また死者数等の予想も出されており、一番最悪のパターンで三二万人の方が亡くなるということです。ただ、この想定は、東北地方太平洋沖地震で得られたデータを始め、いろいろな科学的知見に基づいて発生しうる最大クラスの地震と津波を推定したもので、必ずこれになるわけではありません。

さっき申しました九〇年から一五〇年というのは、毎回これが起きるのではなくて、もっと小さなものも含めて九〇年から一五〇年で、その内の何回かに一回は、こういったすごく大きな地震が来るということです。

巨大地震の発生頻度は極めて低かったのです、だから考慮する必要はないと考えられていたけれど、実際起きたわけですから、それをどう考えるかです。やはり極めて

頻度は低いことから、あまり考えなくてもいいのか、極めて低くても最悪の場合を考えて対応すべきなのかは個人によって変わるとは思いますが、そういうものであるということが断り書きされているのです。

この被害想定死者数はパターンによって異なり、三万二千人から三二万人で、被害額は約一五〇兆円と考えられます。東日本大震災は死者、行方不明者が二万七千人ですが、やはり人口は近畿・中部の方が多いので、被害額も桁違いに大きくなるということが分かっています。

ところで、今回東日本大震災が起こった後に、内陸でいっぱい地震が起きました。例えば、福島県浜通りの地震は四月一日に起きています。それから長野県北部で、マグニチュード六・七が三月一二日午前四時に起こりました。静岡でも起きています。海溝型の地震が起きると、その後、内陸型の地震もいくつも起きることが分かりました。京都大学元総長の尾池和夫先生が、宝永地震・安政地震・東南海地震の発生した七〇年前からその地震が発生した一〇年後までと、その間の期間を比べています。結果、宝永地震が起きた七〇年前から一〇年後までは、たくさん内陸地震が起きています。でも、その間の七〇年は、ほとんど起きていません。また、同じ安政地震でも、安政地震直前の七〇年ぐらいはたくさん起きていますが、その間は起きていません。昭和東南海地震でも同じ傾向があります。どうも、海溝型地震が起きる前と後には、多くの内陸地震が起きるようだということが尾池先生は指摘しています。

近畿地方に特化すると、海溝型地震の前一〇年が非常に突出して多くなっています。その前七〇年がだんだん増えてきているので、内陸型地震についてもどの活断層

が連動するかわからないのですが、どうも海溝型地震の起きる前には内陸型地震が活動するということが経験的に分かっています。海溝型地震は、非常に大きな揺れや津波があり、その前後に活断層が動くということに注意をしなければいけません。私たちの東海圏はたくさん活断層があるわけです。

昭和東南海地震の七〇年前に起きた濃尾地震は、活断層で震度七が起きています。活断層ですから地面に段差ができて、この地域に壊滅的な被害を出した。それは揺れだけでなく、段差を作りますから、この上の構造物が非常に大きな影響を受けることを、また別に考えなくてはいいけません。

一九四五年の東南海地震の一ヶ月後に三河地震が起きています。これも同じように段差を作っています。狭い範囲ですが、非常にひどい揺れで大きな被害を出したことが分かっています。他の活断層は、我々の歴史の中には動いた記録はありませんが、猿投山北断層から猿投高浜断層がもし動くとマグニチュード七を超えると予想されています。

もう一つ、つい先月、活断層学会で発表された内容ですが、名古屋市の直下に活断層があるのではないかと指摘が出ています。二〇〇二年に「あるかも知れない」と指摘されており、その後誰も調べていなかったのですが、昨年ぐらいに名古屋大学の杉戸先生と広島大学の後藤先生がこれを調べ、一月の日本活断層学会で発表されました。

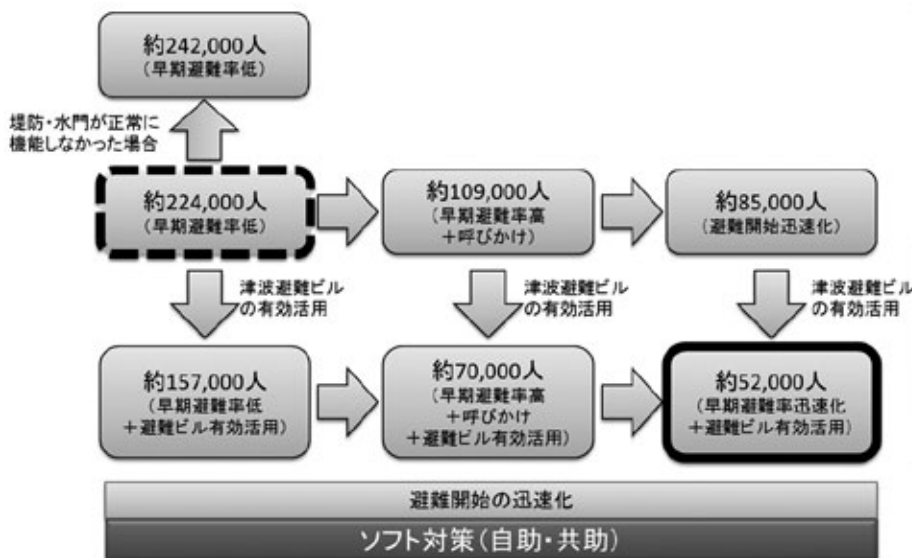
名古屋城の西の端に崖があって、今までは川が削った崖だと考えられていました。この崖はただ下がつっており、川はただ下がる崖を作ることができないので、これはぐちゃっと曲がった変形ではないかと指摘してい

ます。ということとは、変形をもたらす断層がその前面(西側)にあり、それが台地の北側にも続くということです。地形断面のぼこっとした盛り上がりは断層で盛り上がったのではないかと指摘がなされたわけです。これについては私が直接研究したわけではないので、これが正しいのかは分かりません。これからもっと研究が進む中で分かってくると思います。

さて、最後ですが、そういった地震にどう備えるのかということをお述べます。例えば、建物については六二万七千棟の被害が出るが、耐震化が百割の場合は一二万八千棟ぐらになると出ています。それから転倒・落下防止についてです。現状だと約三千人の人が転倒・落下により命を落とす可能性があります。防止対策を百割実施した場合は、九百人ぐら減ると言われています。木造家屋の被害と震度の関係で、阪神淡路大震災のときの例ですが、一九六一年以前の建物はいたい震度六を越えると一気に壊れました。一九八一年までの旧耐震基準のものは、震度六・二とか六・三になると倒壊率は七割を超え、一九八一年の新耐震基準以降のものになつてくると六・五を越えても三〇割ぐら減るといわれるとどまるといふことです。築年と倒壊率の関係は、やはり古いものは弱いということが分かりますので、きちんと手当をしてやるとそれだけ被害が減るといふことです。

津波については、最悪パターンで二二万四千人の人が亡くなりますが、全員がすぐ避難した場合には八万五千人になり、さらに津波避難ビルがちゃんと機能した場合は二万人の死者になります。建物については水門が閉まっていた場合は、一五万七千棟ぐら減り、閉まっていなくて一七万三千棟ぐら減ります。死者についても二四万二千人で、閉まっている場合は二万人ぐら減る

(地震動ケース(基本)、津波ケース(ケース①)、冬・深夜)



と言われています。それらのソフト対策からハード対策までいろいろしっかりやられていると、人的被害は相当軽減できるというのが、大きなポイントです。だからしっかりと避難し、声を掛け合う部分については、一人一人がしっかりとやることで、ずいぶん被害は変わるといえます。そのためには自分の地域がどのくらい揺れ

るのか、津波の被害があるのかないのかをしっかりと知る
ことです。家だけでなく職場や子どもが通っている学校
はどうなのか、「これだけ揺れるならこうしなくては
いけない」ということを最初に確認してほしいと思いま
す。

それから、そういうことを社会全体でしっかりと教育し
ていく、そしてハザードマップなどを使った訓練などを
やっていくことによって、私たちがいざ地震が起きたと
きにどうなるのかをしっかりと認識することがまず第一歩
です。

そして地震は、大小は分かりませんが、絶対に来ます。

いざというときに被害をできるだけ少なくするための事
前準備が大切です。起きる前に、起きたときの想像をた
くましくしておきます。例えば、この部屋で今地震が起
きたらどうなるのか。それを想像するのです。職場や家
ならどうなるのか、家族はどうするのかを考えます。例
えば、子どもなら学校に居るのでそこに待機させるとか、
一つ一つ検証して確認できれば、仮に今起きてても、子ど
もは学校にいるから大丈夫だと思えるわけです。奥さん
はここに居るから大丈夫、おばあちゃんも隣のおばさん
と声を掛け合って避難所に行っているはずだから、後で
そこに行けば良いと安心できます。そのようにリアルに
考えることが大事なのです。行政もそういった情報を
しっかりと整備し、その情報を常に正しく求めて対応を考
えておくことが、最も被害を減らす第一歩です。

だから私たち一人一人の心掛けが非常に大事である
と、被害予測の中でも述べられているし、私たちもそう
思っているところです。

以上で、私の話は終わりにさせていただきます。どう
もありがとうございました。

東日本大震災から考える津波対策 —やどかりプランと空襲警報—

名古屋大学大学院環境学研究所長

溝口 常 俊

みなさんこんにちは、名古屋大学環境研究所の溝口と
申します。今日は「東日本大震災から考える津波対策」
として、話をさせていただきたいと思えます。廣内先生
が非常に詳細な地震の原因と、次に必ず起こるであろう
南海トラフのことをお
話されたので、そのよ
うな事態に遭ったらど
うするかを少し力を込
めて話させていただきます
たいと思えます。

私も一年前にこの会
で話をさせていただきました
まして、その最後の五
分ぐらいに、東北の震
災があったので、「や
どかりプラン」なんて



考えていますと言った記憶があるのですが、それを今日
は強調して話をさせていただきたいと思えます。

地震・水害や火山の爆発とか、いろいろな災害を日本
人は経験して乗り越えてきました。その自然災害に加え
て、東北地方で天明や天保の飢饉がありました。その上、
天然痘、コレラ、スペイン風邪など、やたら脅威にさら
されているわけです。それを全て調べてやろうと、三・

一一以降は強く思いました。

それで、どのようなかたちでやろうといったときに、
今まで使われて来なかった資料に、寺院の過去帳とい
うものがあります。いろいろな学者が推計したり予想したり
て、過去に何人が亡くなったとか出てきますが、本当の
数は過去帳に書かれています。亡くなった人の記録です
から、それをあるときから注目してみようという気にな
ったのです。

その過去帳をベースにして、地誌は尾張の国、三河の
国という、それぞれの旧国ぐらゐのベースで、各村のデー
タがほしいといどこの県にもありますので、それを見て全
体像を知ります。また、礼文島で八〇歳のたこ取り名人
のおじいさんが四〇年つけた日記や、南種子島でロケッ
トのために家を移転させられたおじいさんも四〇年日記
をつけていたので、それらも見せていただきました。す
ると、毎日の記録が書いてあるから、何の事件に遭遇し
たかが分かります。それから、名古屋大学に高木家文書
というのがありまして、木曾三川で江戸時代にどこが決
壊したかという絵図が残っており、それを見たら、
二〇〇〇年の東海豪雨のときに、同じ所が切れているの
です。古い絵図ということで、市町村のハザードマップ
には使われていません。それをちゃんと入れていたら、
同じ所で切れた辺りの人は助かったと思えます。

それから歴史家というのは、どこかに資料があったら、
それを丹念に部屋の中で分析するのが常なのですが、
我々は歴史地理学徒ですから、現場に行つてフィールド
ワークしている聞き取りをします。過去帳もお寺さ
んに見せてもらい、コピーさせてもらつたり、カメラで
撮影させてもらつたりできるので、それを家に帰つて分
析すればいいのです。

ところで、それを見せてもらっているときに住職にいろいろな情報を教えてもらっただけでなく、関係する現場に連れて行ってもらったこともありました。そこは、伊勢の宮川というきれいな川のところから用水路を通して、チフスが発生した場所でした。「こんなきれいなところで、なぜ伝染病が発生したんですか」と聞くと、「昔、繊維工場があって、女工さんいっぱい働いていて、その当時の排水は汚いのが流れていた」ということで、悪い環境だったことが分かりました。また、「天保の飢饉はやはり被害がすごい」と言うと、「じゃあ、それに関係するものが町の中にあるから、行ってみよう」ということで、行って見たら、そこに碑が建っていました。天保の飢饉ですごく犠牲者が出たので、当時のお坊さんが、そういうことがこれから無いようにと、毎年伊勢神宮へお参りして、それがいまだに続いているとのことでした。だから、そういった歴史とか昔の飢饉とか犠牲者とかの教訓が、それぞれの地域で生きているのです。そういうのをキヤッチするために現地に行かなくてはいけないと考え、フィールドワークを兼ねて、いろいろやり出しています。

特に三・一一後は津波などが非常に気になるので、それをどう我々は考えたらいいかを、過去の資料をしっかりと押さえて、未来に生かすということをやろうとしています。

ところで、建築の人たちは建築するのが当たり前ですから、家やビル全体で壊れないものを作ることを研究しています。また、地震の専門家の研究により、その原因や予測について非常に正確になってきましたので、とてもありがたいと思います。しかし、それで人が助けられるのかという疑問を発せられると、「いや、そこまで正

確な予想はちょっと」という感じです。また、がちっとしたビルを建てれば犠牲者が少なくなると思うのだけれど、そのお金は出せるのでしょうか。高層ビルを建てるとか、筋交いをやってとか、家全体を強固なものにするにはお金がないとできません。しかし、今までの経験でいくと、犠牲になっていない人はお金がない人であり、そういう人を助けることを考えないと、犠牲者を大幅に減らせません。だから、変な思いつきですので笑っていただいて結構ですが、「やどかりプランなんていうのがあるよね」と。また、「みなさん逃げなさい」とアナウンスをやっても逃げないので、強制的に逃げさせるにはどうしたらいいかを考えました。日本人は空襲警報を経験してきたじゃないですか。あれが鳴ったら、有無を言わず逃げましたよね。うちのところは来ないだろう、とは言わずに逃げました。それくらい強烈にやればなんとか助かるのではないかと、いろいろ考えるわけです。そういったことを私はみなさんに発信しています。それに対して反論はあったけれど、だんだん、やっていこう、とやってきたのです。ですから、そういうことを考えてみなさんに提案していきたいと思います。

さて、朝日文左衛門の『鸚鵡籠中記』は、あまりにも内容が面白いのでベストセラーになりました。そのデータベースを五年ぐらいかけて作り直して全部読んでみると、約三〇年間で、地震や雷のない年はないぐらいい、毎年のように自然災害が起こっていることがわかります。先ほど廣内先生のお話の中でも出てきたように、元禄一六年に大きな地震があり、また宝永四年に余震も含めて多くの地震が起きたと書いてありました。普通のお奉行さんの日記の中に、こんなに記載があったことにまず驚きました。

愛知県には「愛知県災害史」というのがありますが、有名なものしかピックアップしていませんので、その資料だけを見ると、その三〇年の間に二回しか地震がなかったのかという錯覚を起こしてしまうのです。ところが、小さい地震を含めればものすごくたくさんあったということを我々は知っておくべきです。中味を読んでいると、すごく詳しくて、扉が倒れたとか、火事があったとか、こと細かく書いてあるのです。それをきちんと整理していくと、名古屋の中での被害がわかるので、そういうことをやろうとしています。

これも日記に書かれていてびっくりしたことなのですが、「地裂けて泥水沸き」と、液状化現象が述べられています。その場所は名古屋城の東にあり、矢田川の方に降る、ちょうど洪積台地から沖積層へ移り変わる所なのです。そこは今、コンクリートで地面を掘れないからどうしようもないけれど、境目に地盤の弱いところがあって、泥水が出てきたということが分かります。

では、地震のときにどうなったかと言うと、「熱田に行って津波が・・」という記述があり、津波が本当に来たんですよ。で、どうしたかと言ったら、しようがないから大麻を持って海で騒いでいたと。このように、とっさの時、人はどういう行動をするかということが書いてあるのです。

これだけ詳しく書いてあると、日記も使えます。それが江戸から高知まで、どこで何が起きたのか書いてあるのです。このように、日記も災害のために使うことができます、ということは昨年お話ししたことです。災害というのは毎日のようにやってきました。これを止めましょうというのは無理なので、どうやって災害に対処していくかが重要です。

昨年六月に、新聞、テレビ報道で有名になった石巻市の大川小学校があるあたりに行ってきました。先生の誘導が悪かったのだと非難された小学校です。裏山へ逃げずに、北上川の方へ逃げようと連れていった途中でやられましたよね。

この新北大橋に行く途中、川の中に何かあるので、なんだろうと思っただけでいって見たら、それは鉄橋の一部でした。鉄橋が流されているくらいなので、堤防の方へ逃げて、助からなかったでしょう。だから大川小学校の避難の正解は、すぐ裏に山があったから、そこに逃げるのがよかったですのではないかと、車で走ってみてしまいました。

山を越え雄勝町へ行って見たら、「津波に気をつけましょう」という碑が無残にも壊されて流れていたのです。どこへ行っても、三陸の都市はこんな感じでした。



雄勝町 流された津波記念碑

後で写真を整理していて、よく見たらこれは助かるかも知れないと思ったのは、三〇センチから五〇センチのコンクリートの家の土台です。どんな被災地へ行っても、この土台だけはかなりの確率で残っているのです。ここに寝転がっていたら、助かっただろうな、と直感的に思いました。

なぜかと言うと、高波のエネルギーは上から来ますが、津波はエネルギーは下の方も一緒に、壁のように全部根こそぎ持って行ってしまうので、大きな家でも船でもみんな流されてしまうのです。それが一波二波三波と来て、また引き波が強いので全部やられてしまうのですが、土台だけは残っていました。そこで、ここに潜ろう、ということ直感的に考え出したのです。

専門家が、高台に逃げるとかいろいろ言っていますが、それを一八〇度転換して、津波が来たら潜ればよいと考えました。最初は恐怖心を持たれて全員に反対されたのですが、ここにトイレの大ききぐらいの半地下シェルターを作っておいて、いざというときそこに逃げ、半日も待つていけば波が引いていきます。引き波さえ回避できれば、そこに閉じこもっていればいいのです。快適な半地下シェルターを作っておけば助かる、とだんだん分かってきました。

さきほどの廣内先生の話を聞いても、必ず津波は来て、必ず犠牲者が出る、ということでしたよね。その時の最後の手段として、こういうところにシェルターを作っておけば、被害は半減どころか、もっと減るのではないのでしょうか。

今までの対策は、ちゃんと訓練して言うことを聞いた人、優等生を助けるものです。しかし実際に現地に行ってみても、あるいは日本の農山村のどこに行ってみても、老人の一人暮らしが当たり前のようにあるのです。また病人や赤ちゃんもいます。そういう人に逃げろと言ったって、逃げられるわけではないのです。

津波が目の前に現れてから、逃げる所、一分間あれば助かる所ってどこだ、と聞いたら、自分の家しかないですよ。全部強固な建物にすると何千万円もかかります

が、自分の家のトイレ一室ぐらいたったら、数十万円から百万円でできます。酸素も供給され、すごい圧力に耐えられる構造にし、携帯電話とか、食糧や薬を用意しておけばいいでしょう。それならば少ないお金で、そこそ貧しい人にもできるのです、こういったものが各家にあれば、助かるのではないかと思います。

岩手県の田老の和尚さんに聞いた話ですが、「本当に可哀想な人が亡くなった」と。「今すぐ生きている人を探せ」と命令を受けた若い消防団員が、何人か亡くなりました。

このようなときに人間がどのような行動をとるのか、心理学者が「同調バイアス」とか言っていました。自分分は助かるだろう、と思いきむということです。例えばどういふことかという、「チリ津波のときに自分のところは助かったから、今度も大丈夫だろう」と安心していた人が全部やられました。

また、誰でも愛他行動をするそうです。自分はピンピンして助かっているけれど、隣のおばあちゃんが気になるとか家族が気になるとか言って、一度高台に逃げた人も、また助けに戻っていきます。若い元気な人が、他人を愛する愛他行動に走り、おばあちゃんを助け出そうと抱えた瞬間に、津波が来ました。消防団員は使命感を持って突撃していき、助け出した後で波に飲まれてしまいました。そんなときに半地下シェルターがあれば、助けた上で、そこに潜って一・二時間、長くて半日我慢していれば助かるわけです。そういった予備的な部屋を作った方がいいのではないかと、ことを、「やどかりプラン」と名付けて学生達に宣伝しています。このような何かを考えなくてはいけないと思っています。

名取市の関上中学校は非常に被害がひどかったところ

で、ちょうど三月一日は卒業式でした。その中学校の黒板に、日直、明日香さんと書かれた写真を撮ってきました。後日のNHKの放送で、犠牲になった中学生として、樋口明日香という名が書いてありました。亡くなったのを知り、もう泣けてきました。二時四六分に地震が起きて津波が来たのが一時間後ですから、もう二時間卒業式が遅いか、あるいはもう二時間津波が早く来ていたら、中学校には四階があるから、助かったのに、と思いました。



打ち合わせ	8:15~ 8:35
1,2年登校	~ 8:50
朝の会	8:50~ 8:55
清掃	8:55~ 9:10
飛躍配付・待機	9:10~ 9:30
卒業生登校	~ 9:30
1,2年入場	9:30~ 9:40
卒業生入場	9:55~ 10:00
卒業式	10:00~ 11:40
1,2年帰りの会・下校	11:50~ 12:00
卒業生学活	11:55~ 12:40
卒業生見送り	12:45~ 13:10
昼食	13:20~ 13:50
打ち合わせ	14:00~
会場片付け	14:15~

関上中学校の日直名が書かれた黒板と卒業式当日日程表

関上の日和山に登って山頂から辺りを眺めると、石の土台が残っているものの、やはりみんなやられていることが見て取れます。

松島に行くと、松島側は島がたくさんあって助かったのですが、反対側の石巻の湾に入っているところは、島がないので全滅したのです。

宮古市田老の10m堤防

この防潮堤に登って町を見渡すと、山麓に、流されず残っているお寺がありました。そのお寺の和尚さんは、報道陣シャットアウトとか、過去帳は見せないとか、非常に個性の強い方だと聞いていました。だから、そこへ行くのはよそ



田老の10m堤防

うと思ったのですが、実際に会ってみたら、すごく親切な人で「俺は憎まれ役だ。厳しく言うから報道陣に嫌われて、東京のある新聞と秋田のある新聞が、自分のことをめちやくちやに書いたんだよ」という話をされました。檀家が一二〇人亡くなったので、その初七日に、いっばい並べた位牌に向かって住職は「馬鹿野郎、何で逃げなかつたんだ」と叫んだそうです。その「馬鹿野郎」を新聞社が「狂った僧侶」と書き立てたそうです。それから一ヶ月後になって、また何百人が集まったときに、その僧侶は、声が出ずに涙をぼろぼろ流してしゃべれなかつたそうです。それくらい人を思っている僧侶から、先ほ

どの消防団員の話や、私たちの義捐金が困窮している被害者にすぐに届かないため、本当にまじめな人が自殺をしてみました。帰りがけに、一年後に建てた今回の津波の供養塔を見せていただきました。それから昭和八年の「昭和の大津波」の供養塔や、明治三十九年の碑もありました。津波が来ないようにと三回建てられているのです。しかし、立て続けに百何十年の間に三回もの大きな津波があつて、多くの犠牲者が出ている所なのです。

それでも、生き残った人の半分ぐらいが、今後ここに帰りたいと言うのです。そうすると、ここに安全に住める環境を作らなくてはいけません。高層ビルを建ててもいいのですが、それよりも安く済む方法を考えなくてはいけないということです。

関上の話に戻りますが、その人たちの言い伝えて、伊達政宗が作った水路がありまして、どんな津波が来てもここで止まると言つて、みんな安心していたのです。今回NHKで犠牲者のチェックをした

たら、一番犠牲者が多かったのは二丁目です。逃げた人たちはある程度助かりましたが、水路があるから大丈夫だということで、安心していらした所は全部やられてしまった、という話を聞きました。



日和山からみた関上2丁目

それで、これから
のことですが、東北
地方へ行ったとき、
「やどかりプラン」
について、五人の和
尚さんのうち、四人
ぐらいの方が「いい
のでは」と言ってい
ただけたので、実際
にやろうかなと
思っています。ま
た、私は歴史地理が
専門なので、やはり
過去の事例の載った古い資料を探して、その中で、ど
のように犠牲者が出て、そして人はどう行動して、どう
助けたかに注目をして、データを集めようかなと思っ
ています。それから、先程言いましたように、過去帳をも
とにして過去の事実を調査します。過去帳には、○歳児
という宗門帳では書かれていなかったデータも、水子と
か孩子（がいし）とかという形で出てきます。江戸時代
には小さな子は犠牲になっていたのが、明治や大正時代
になってどうなったんだらうかということ、地域差を
含め、確実に押さえておこうと思います。それから、過
去帳の収集をこれからどんどん進めていきますが、やは
り南海トラフの三連動による津波が恐ろしいので、この
静岡、愛知、三重の海岸沿いのお寺を一町に一ヶ所ぐら
い訪ねてデータを集めようと思います。それが終われば
また四国の方へ行こうと思っています。



津波前の関上2丁目の町並み

そこで、ディアナ号というロシアの船の話が出てきまし

た。これは、安政の津波で下田の方に流された船が、駿
河湾へ来て、田子の浦まで流されたというものです。
そのディアナ号に関し、名古屋大学を卒業して静岡県
の高校で英語の先生をやっている子が、絵本を作しまし
た。ディアナ号が津波で流されたとき、同じ津波で大被
害に遭った日本の村人たちが、自分たちも被害に遭っ
ているのに、このディアナ号のロシア人を助けているとい
う物語なのです。実際にこの船の錨が富士市の公園に
飾ってあります。自分たちも犠牲者なのに、ロシア人を
助けたという感動的な話です。
今、日本はロシアと領土問題がありますが、こういっ
た絵本をロシアに進呈して、政府はただで日本人は
すごいんだということを感じてもらえれば、外交でかな
り活用できるのではないかと思います。

過去帳の話に戻りますが、天保四年から五年の天保の
飢饉のときは、死者がほとんど多いです。それから、コレ
ラが流行った年や、スペイン風邪が流行った年も多いで
す。このように分析していくと、その寺の檀家には限ら
れますが、どんな事件があったのかを比較できるので、
これを地域ごとに調べ始めたところです。
それから最初の因島の過去帳では、天保の飢饉の他に、
海難事故がわかりました。明らかにその土地ならではの
死者が出ています。それから、童子とか童女というのは
一五歳以下の子どものごとですけども、その死者が多
いときは、やはり伝染病か天然痘が流行っています。伝
染病などの記録があるので、それを年表と照合してみ
ると、そのときに打撃を受けたということが分かります。
また、大正七・八年はスペイン風邪で日本全国で四五万
人も亡くなっているのです。これはもう津波以上で、戦
争と同じくらいです。そういうものがどのように伝播し
ていったのかも、過去帳で分かるはずですよ。
先頃、中川区のあるお寺さんに行って過去帳を見せて
もらったら、濃尾大震災で本堂が倒れて、隣村の誰々が
亡くなったということが書いてありました。このように、
住職によっては、過去帳の中に過去の大きな事件につ
いてのメモを残しています。それをチェックしようと思っ
ています。
また、広島大学で学会があったときに、静岡県のご住
職の方と知り合いになりました。後日お寺へ行って過去
帳をコピーさせていただきました。まだ分析をしていな
いのですが、そのとき「こんなことが過去帳からわかり
ますよ」と説明したら、「へえ、『大正とか昭和でこんな
に死者が出ているから伝染病の可能性がある』なんて、
知りませんでした」ということでした。そういうことも
含めてきちんと推移を調べ、次に生かそうと思いました。
私は、プライバシーの問題があるので、新しい過去帳
は見えないという主義でやっています。但し、一九五〇年
までのものは見せてほしいと思っています。なぜかとい
うと、いろいろと過去帳を見ていたら、「レイテ島で死す」
とか、外地へ行って戦争で亡くなった若者の記述がどん
どん出てくるのです。津波や伝染病も恐ろしいけれども、
それ以上に戦争は悲惨であったと思いますので、それ
もきちんと調査しようと考えています。
最後になりますが、過去の三連動の地震があったとき
にはおそらく死者が出ており、調査をすれば「過去にこ
ういうことがあったので気をつけましょう」と言えます
ので、三重県・和歌山県・高知県の過去帳は特に力を注
いで調査していこうと思います。
本日はどうもありがとうございました。

『新修 名古屋市史』資料編(9巻)・本文編(全10巻)発売中

『新修名古屋市史』は現在の名古屋市域を対象とした、原始・古代から現代に至るはじめての通史です。図・表・写真を豊富に取り入れ、それまでの研究成果を踏まえつつ、平易に読める市民のための市史として本文編全10巻を発刊しています。

また、本文編に引き続いて、資料編(全11巻)の刊行を継続しています。現在までに資料編を9巻刊行しており、この5月下旬には資料編「考古2」の販売開始を予定しています。



●巻構成

資料編(監修者 元愛知県立大学長 塩澤 君夫)

巻	時代等	編集委員(肩書きは当時のもの)	頁数・付図等
近代1	明治4年～40年頃	名城大学非常勤講師 小林 賢治	915頁
近世1	尾張藩創設～明治4年	愛知学院大学名誉教授 林 董一	968頁
考古1	旧石器～古墳時代	愛知県立松蔭高等学校長 加藤 安信	965頁
自然	自然編	名古屋大学教授 海津 正倫	548頁 オールカラー 目録 228頁
近代2	大正～昭和恐慌	名古屋学院大学教授 笠井 雅直	997頁
民俗	民俗編	元名古屋芸術大学非常勤講師 津田 豊彦	974頁
近世2	江戸時代前期	愛知学院大学名誉教授 林 董一	879頁
近世3	江戸時代後期	愛知教育大学名誉教授 吉永 昭	928頁
現代	終戦～昭和35年頃	元豊田工業高等専門学校建築学科教授 松尾 博雄	1,028頁
考古2	飛鳥～江戸時代	大同大学大同高等学校長 加藤 安信	約1,000頁 平成25年5月下旬販売開始予定

本文編(監修者 学習院大学名誉教授 故大石 慎三郎)

巻	時代等	編集委員(肩書きは当時のもの)	頁数・付図等
第1巻	旧石器～平安時代	日本福祉大学教授 福岡 猛志	894頁 遺跡地名表・遺跡分布地図
第2巻	鎌倉～安土・桃山時代	名古屋大学教授 三鬼清一郎	868頁 円覚寺領尾張国富田荘絵図 他2点
第3巻	江戸時代前期	愛知学院大学教授 林 董一	984頁 享元絵巻 他2点
第4巻	江戸時代後期	愛知教育大学名誉教授 吉永 昭	922頁
第5巻	明治時代	前愛知県立大学長 塩澤 君夫 金城学院大学教授 近藤 哲生	931頁 改正愛知県名古屋明細圖 他2点
第6巻	大正～昭和時代(戦前)	金城学院大学教授 近藤 哲生	945頁 名古屋市實測圖 他2点
第7巻	昭和時代(戦後)	元名古屋市博物館副館長 久住 典夫	1,017頁
第8巻	自然編	名古屋大学教授 海津 正倫	428頁 オールカラー
第9巻	民俗編	名古屋芸術大学非常勤講師 津田 豊彦	924頁
第10巻	年表・索引		450頁 第1～9巻本文収録のCD-ROM

●定 価

各巻 4,500円

●販売方法

市民情報センター内販売コーナー(市役所西庁舎1階)、市政資料館、名古屋城内正門横売店、名古屋都市センターまちづくりライブラリー(金山南ビル12階)で購入できます。また最寄りの書店からも注文できます。

●お問い合わせ先

名古屋市市政資料館 〒461-0011 名古屋市東区白壁一丁目3番地
TEL(052)953-0051 FAX(052)953-4398

公文書等の公開について（市政資料館の閲覧室で閲覧・複写していただけます。）

○「公文書」の公開

市政資料館では、明治から昭和に至る名古屋市の公文書を整理・保存し、公開（閲覧・複写）しています。平成24年度は、昭和56年度までに完結し整理の終了した公文書526簿冊を新たに公開しました。このうち、6簿冊については個人情報等を保護するため、簿冊の一部を利用制限しています。これまでの公開分とあわせて、11,213冊が利用できます。

〔新たに公開した主な公文書〕

*「」内は簿冊名、（）内は簿冊の完結年度

「名古屋駅前土地区画整理予算資料関係書綴 昭和12年 駅前土地区画整理事業」（昭和13年度）

「移転命令関係綴 駅前土地区画整理事業」（昭和14年度）

「名古屋都市計画土地区画整理関係綴 昭和11年 駅前土地区画整理事業」（昭和17年度）

「耕地整理法施行規則第10条申告書綴 駅前土地区画整理事業」（昭和18年度）

「名古屋駅前土地区画整理地区内 鉄道用地関係書綴 土木局地理課 昭和13年 駅前土地区画整理事業」（昭和20年度）

「建物疎開（跡地）関係 防空疎開小空地（賃借）関係 第202号～第281号のうち56件（昭和19年2月26日指定）」（昭和20年度）

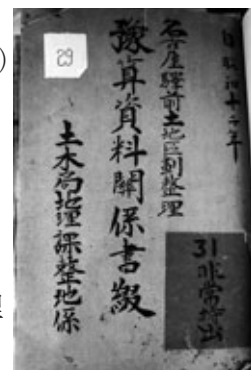
「名古屋復興特別都市計画土地区画整理地区内市有地売却関係書綴 駅前土地区画整理事業」（昭和23年度）

「名古屋市債の取得・管理関係綴 昭和54～56年度」（昭和56年度）

「復興土地区画整理事業 熱田第2工区 公共施設用地調書（道路）」（昭和56年度）

「基金関係綴 昭和54～55年度」（昭和56年度）

「現先（現物先物取引）関係綴 昭和56年度」（昭和56年度）



○「行政資料」の公開

名古屋市が発行した刊行物や地図、写真、地籍図など79,588冊（平成25年1月末時点）を利用できます。

○「市史資料」の公開

新修名古屋市史の編さん過程で収集した資料のうち整理が終わったものを複製（紙焼本）により1,898冊公開しています（個人情報等を保護するため、資料の一部を利用制限しています）。

表紙の説明



宮の津（現在の熱田）旅人津浪を懼る図 安政見聞録
（愛知工業大学地域防災研究センター所蔵）

この津波を引き起こした安政東海地震は、1854年12月23日に発生した巨大地震である。

M8.4と推定され、中部～近畿の太平洋側を中心に震度6以上の強い揺れが襲い、震度5以上の地域も広範囲に及んだ。名古屋市の震度は5～6と推定される。



伊勢湾台風襲来後、名古屋市役所につり下げられた懸垂幕（名古屋市市政資料館所蔵）

昭和34年9月26日夜半、名古屋地方一帯は超大型猛台風に襲われた。特に市南部低地域においては想像を絶する高潮と流木の惨禍により、甚大な被害を受けた。写真は、復興に向けて10月5日につり下げられた懸垂幕である。

資料編「考古2」刊行のお知らせ

体裁 B5判 約一〇〇〇頁 上製本 箱入り
定価 四千五百円 (平成二十五年五月下旬販売開始予定)

資料編「考古2」刊行にあたって

「考古2」編集委員 加藤 安信

「新修名古屋市史資料編 考古2」は平成十九年度に刊行した「考古1」の続巻で、飛鳥時代から江戸時代までの主要な遺跡と考古資料を掲載しています。この時代は、文献や絵図などの文字史料が歴史資料の中心となっていた時代ですが、土に埋もれた遺物や遺跡もまた歴史の諸相を具体的に物語る実証性の高い資料となっています。

本書では、第1章で総論として古代から近世までの遺跡の分布状況と時代の概観について触れ、第2章において地域の主要遺跡百七十か所を取り上げ、①古代の集落遺跡と寺院関連遺跡、②中世の集落遺跡と城館跡、③古代・中世の窯業生産遺跡、そして④近世の名古屋城関連遺跡と城下町遺跡に区分して、発掘調査の成果を基に解説を加えています。各遺跡が持っている情報と価値をイメージしやすいように、考古資料の実測図や発掘調査状況の写真などを出来る限り多く掲載するように心がけました。

第3章の集成・特論では、①出土瓦からみた尾張元興寺、②古代尾張における施釉陶器生産と歴史的背景、③記録に残された中世城館跡、④名古屋城の丁場割と石垣の刻印、⑤尾張藩主徳川家墓所、⑥尾張藩江戸屋敷跡出土の考古資料等をテーマとし、名古屋の考古資料についての理解をより深めて頂くように努めました。

さらに、補遺として「考古1」刊行後に新たに発見されて注目を浴びた、平手町遺跡の船形木棺などの古墳時代以前の資料についても所収し、あわせて名古屋の遺跡調査史及び遺跡・考古資料に関する文献一覧も掲載しています。

社会の発展に伴って多くの遺跡は消滅

してしまいましたが、現在守山区で進められている「歴史の里」事業のように、今日の街作りの中で、遺跡が歴史を具体的に物語る文化遺産として伝えられていくことは、喜ばしい限りです。本書が歴史理解の資料として、また歴史散策のテキストとしても活用されれば、幸いに存じます。



NN259号窯跡出土灰釉陶器
(名古屋見晴考古資料館所蔵 名古屋市博物館提供)

資料編「考古2」目次

第1章 総論

- 第1節 本書作成の基本
- 第2節 名古屋の地形と古代から近世までの遺跡の分布

第2章 主要遺跡解説

- 第1節 古代の遺跡
- 第2節 中世の遺跡
- 第3節 古代・中世の窯業生産遺跡
- 第4節 近世の遺跡

第3章 集成・特論

- 第1節 出土瓦からみた尾張元興寺
- 第2節 古代尾張における施釉陶器生産と歴史的背景
- 第3節 記録に残された中世城館跡
- 第4節 戦国那古野城の復元
- 第5節 桶狭間の戦いに関連する遺跡・伝承地・記念碑
- 第6節 名古屋城の丁場割と石垣の刻印
- 第7節 尾張藩主徳川家墓所
- 第8節 尾張藩江戸屋敷跡出土の考古資料

第4章 補遺

- 第1節 仁所遺跡の弥生時代土製品
- 第2節 平手町遺跡の船形木棺
- 第3節 中社古墳・南社古墳の埴輪
- 第4節 西大久手古墳の形象埴輪

第5章 名古屋の遺跡調査史

- 遺跡一覧表
- 遺跡分布図
- 用語解説
- 参考文献一覧

名古屋市市政資料館

所在地 〒461-0011 名古屋市東区白壁一丁目3番地
(TEL) 052-953-0051 (FAX) 052-953-4398

交通案内 / 地下鉄名城線「市役所」下車 東へ徒歩8分
市バス・名鉄バス「清水口」下車 南西へ徒歩8分
市バス・名鉄バス「市役所」下車 東へ徒歩8分
市バス・メーグル「市政資料館南」下車 北へ徒歩5分
名鉄瀬戸線「東大手」下車 南へ徒歩5分

開館時間 / 午前9:00～午後5:00

休館日 / 月曜日(休日の場合はその直後の平日)、
毎月第3木曜日(休日の場合は第4木曜日)、
12月29日～1月3日

ホームページは「名古屋市市政資料館案内」で検索してください。
公文書目録のダウンロードや集会室(半日1,000円～)・展示室(全日1,000円～)の予約状況などがご覧いただけます。

公共交通機関をご利用下さい

